

日本音楽学会 2022 年度支部横断企画（第 2 期採択）

学術シンポジウム「20 世紀日本と西洋音楽理論」 第 1 部「近代日本と西洋音楽理論——超領域的展開の試み」

報告記

報告者：竹内直、仲辻真帆、新居洋子、西田紘子
報告日：2023 年 4 月 19 日（水）

2023 年 3 月 19 日（日）、東京藝術大学音楽学部 5 号館 109 教室にて学術シンポジウム「20 世紀日本と西洋音楽理論」を開催した。対面・遠隔併用のハイブリッド形式とし、海外を含む遠方からの参加も可能とした。事前参加登録者は 146 名で、実際の参加者は対面参加者 37 名、オンライン（Zoom）参加者 57 名、合計 94 名であった。（他に登壇者 13 名と運営補助者 6 名が参加している。）

今回の学術シンポジウムは、10 時から 12 時 30 分までを第 1 部：シンポジウム&ミニコンサート「近代日本と西洋音楽理論——超領域的展開の試み」とし、シンポジウムでは仲辻真帆（東日本支部、東京藝術大学）、竹内直（西日本支部、京都市立芸術大学）、西田紘子（西日本支部、九州大学）、新居洋子（非会員、大東文化大学）が研究発表をおこなった。（氏名は発表順に記載した。所属はシンポジウム開催時点のものである。）その後、塚原康子氏（東日本支部、東京藝術大学）からコメントをいただき、質疑応答をおこなった。12 時から 12 時 30 分までミニコンサートを開催し、シンポジウムに関連した曲目が松岡あさひ氏（ピアノ、東京藝術大学）と松岡多恵氏（ソプラノ、二期会）により演奏された。

13 時 20 分から 16 時までは関連イベントとして第 2 部：国際シンポジウム「相互文化主義と『洋楽』研究の現在——東西二元論とその超克 Interculturalism and Yōgaku Studies Today: East-West Binary and Beyond」が開催された。ヤヨイ・ウノ・エヴェレット氏 Yayoi U. Everett（ニューヨーク市立大学）の基調講演に始まり、ラッセ・レヘトネン氏 Lasse Lehtonen（ヘルシンキ大学）、安川智子氏（北里大学）、張惠玲氏 Cheong Wai Ling（香港中文大学）、藤田茂氏（東京音楽大学）による研究発表があった。長木誠司氏（東京大学）からのコメント後、質疑応答がなされた。（氏名は発言順、所属はシンポジウム開催時点。）

日本音楽学会の 2022 年度「支部横断企画」として採択していただいたのは第 1 部のシンポジウム&ミニコンサートであるため、本報告記では第 1 部について詳述する。

「近代日本と西洋音楽理論——超領域的展開の試み」は、近代日本音楽史研究に関して、西洋音楽理論の受容や日本と西洋の音楽理論上の相互作用といった従来の研究で不足している「音楽理論」を切り口とした企画である。近代日本音楽史と西洋音楽理論の双方の「領域」から、複数の地域を対象として、実践としての演奏を交えつつ、「領域」を横断あるいは超越してこのテーマにアプローチしようという試みであった。

以下、それぞれの研究発表について、時系列順に要点を記す。

最初に、仲辻真帆が「東京音楽学校における西洋音楽理論受容」というタイトルで発表した。近代日本の音楽理論教育史の研究状況を概観した後、日本の音楽専門教育機関における音楽理論教育がどのように開始されたのかという点について東京藝術大学附属図書館

所蔵の文書綴りに基づき説明した。特に音楽取調掛における初期の音楽理論教育の軸を成していた和声学について、1883（明治 16）年以降の試験問題を確認するとともに、昭和前期にかけて音楽取調掛および東京音楽学校で使用されていたテキストを追及した。歴史的資料の調査結果として、今日使用される TDS 記号や機能と声教育は昭和初期、1930年代から本格化したことが指摘できる。本発表で重点が置かれたのは、東京音楽学校で音楽理論科目を担当した一人で、1931（昭和 6）年の同校本科作曲部（現在の東京藝術大学音楽学部作曲科）新設に携わった信時潔（1887～1965）の自筆メモに基づく考察であった。信時がフーゴー・リーマン Hugo Riemann（1849～1919）の著述を参照しながら和声の「機能」や旋法について検討を重ねていたこと、「日本的旋律」の和声化や教会旋法と日本の伝統的な音階の融合を模索し、和声法や終止法を雅楽（笙）、アジアの音楽（バリ、シャム、ジャワ）、12 音音楽等のグローバルな研究的視座から考察していたことなど、これまで十分に認識されてこなかった一面を明らかにした。

2 人目の登壇者は竹内直で、発表タイトルは「『在野』作曲家の音楽語法形成——早坂文雄を例として」であった。官学（東京音楽学校）に対して「在野」という用語が使用されているが、実際にはアカデミズムとの関連も認められ、その線引きは曖昧であることが最初に確認された。（この点については冒頭に仲辻が趣旨説明でも言及した。今回の企画では「官学」と「前衛」、「アカデミズム」と「反アカデミズム」、「東洋」と「西洋」といった二項対立で対象を捉えようとしておらず、むしろ従来の研究でそのように理解されがちな対象を「音楽理論」という視座から俯瞰的に展望し新たな知見を得ようとしている。）竹内は研究の背景として、1920～30 年代の「在野」作曲家の諸相について説明した後、早坂文雄（1914～1955）の「和声」観を田中正平（1862～1945）の「日本和声」への反応や 1930～40 年代の「日本和声」を巡る言説とあわせて考察した。早坂の「和声」観は、西欧的な三和音システムへ疑義を示したものであり、田中正平の「日本和声」に対する早坂の修正案は、とりわけ旋法的な音の進行によって特徴づけられる。垂直方向だけではなく水平方向の音の関係性に響きの有機性を求めた早坂の線的な音楽は、音楽観の背景という意味で、グレゴリオ聖歌との関連性を指摘できる。この点については戦後の創作手法への繋がりという観点からも重要であることを確認した。

続いて西田紘子が「フーゴー・リーマン周辺にみる日独の音楽理論交流」というタイトルで発表した。まず日本との交流（相互作用）という点に着目し、フーゴー・リーマン研究を、「日本和声」の問題、日本人との交流、リーマンの和声理論の日本受容の各項目からそれぞれ整理した。本発表では、リーマンにおける日本の音楽の和声化について、『音楽週刊誌』第 33 号掲載論考「日本の音楽について」と Breitkopf und Härtel 社発行楽譜「6 つの中国・日本オリジナルの曲」から考察した。5 音音階の第 3 音の解釈や「和音代理」という考え方について説明しながらリーマンが試みた《Haru no uta 春の歌》と《Kimi to wakarete 君と別れて》の和声付けについて考察を加えた。さらに、日本の雑誌記事におけるリーマン和声理論受容について、本格的な受容は 1930 年代に入ってからであり、当該時期においても紹介の域を出ないことを明らかにした。今回の発表では特に、リーマンの和声論を批判した山本直忠（1904～1965）の言説（1932 年）を紹介し、山本が信時潔、片山頼太郎、辻莊一らにも相談した上で提案した「山本式」の和声論について考察した。

最後の登壇者は新居洋子で、「中国知識人における西洋音楽理論と『中国音楽』」について発表した。まず、1920～30 年代にドイツで音楽学を学んだ王光祈（1891～1936）の著述を紹介した。王の『西洋音楽史綱要』（1930 序）では単声音楽から多声音楽を経て和

声音楽へと向かう経緯が「線」から「体」への発展と捉えられ、機能和声の発達への言及もあるが、そこには西洋を中心とした進歩主義史観の影響が見受けられる。こうした音楽史観にもとづき、『西洋音楽史綱要』では中国音楽が「単音音楽時代」にとどまり、西洋近代音楽に比肩できないとの説が唱えられる。次にこのような中国音楽停滞説の背景として、17～20世紀初頭のヨーロッパの人々の中国音楽観を検討し、中国の音楽がおおむね、貧しい和音しかもたない「単調な」音楽として表象されたことを指摘した。しかし、クーラン Maurice Courant (1865～1935) はその論文 (1912) で、朱載堉『楽律全書』に載せられた様々な楽譜をもとに和音的な側面を示そうと試み、また「起調畢曲」の説を機能和声に通じるものと捉えた。さらにこうしたクーランの見方が『中国音楽史』(1931序)執筆時の王光祈に受容され、同著における、前述の『西洋音楽史綱要』とは大きく異なる中国音楽観の展開へと繋がった可能性を指摘した。

以上の4人の研究発表に関して、塚原康子氏から総評をいただいた。まず、今回のシンポジウムの考察内容はこれまでの研究蓄積が少ない部分であり、その意味で本企画が画期的であったとの評価がなされた。4人の発表全体を俯瞰すると、日本側からの西洋音楽理論へのアプローチにはじまり、後に双方向からの考察がなされ、さらに対象を相対化する参照軸の提供もみられたことが確認された。日本の音楽教育では理論が独立した学問領域というよりも実践との関係性において展開されてきたことについて、音楽取調掛や東京音楽学校における諸事例とともに説明があった。西洋音楽理論が自国の音楽の見直しにつながったという指摘もなされ、音楽文化変容(近世までの日本音楽は中国音楽に由来する部分が大半であったが近代に西洋音楽に基づくようになった点)や音楽研究史といった様々な側面から歴史の変遷とともに音楽理論を巡る動向が変容してきたことを再認識できるコメントであった。

質疑応答では、明土真也氏から日本の和声理論においては5音音階と7音音階を混合したことで事象が複雑化していったという見解が示され、5音音階と7音音階を同列に検討することの妥当性について慎重に考察を重ねる必要がある点を確認した。船山隆氏からは、登壇者の研究姿勢を評価する声とともに、100年スパンあるいはより大きな巨視的視点をもって研究を深めていくことの重要性が指摘された。

30分間の演奏会では、以下の作品が演奏された。

1. 《6つの中国と日本オリジナルの曲》より〈春の歌〉

《Sechs originale chinesische und japanische Melodien für Violine und Klavier gesetzt》
〈Frühlingslied〉

《Six original Chinese and Japanese melodies for violin and piano》 〈Spring song〉

《来自中国与日本的原创曲6首》 〈春之歌〉

2. 信時潔編曲《小曲俚謡集》より〈かぞえうた〉

《Volkslieder》 〈Zählenlied〉

《Folk-songs》 〈Counting song〉

《小曲俚謡集》 〈数数歌〉

3. 《6つの中国と日本オリジナルの曲》より〈君と別れて〉

《Sechs originale chinesische und japanische Melodien für Violine und Klavier gesetzt》
〈Liebeslied〉

《Six original Chinese and Japanese melodies set for violin and piano》 〈Love Song〉

《来自中国与日本的原创曲 6 首》之《与你分别》

4. 信時潔編曲《君と別れて》

《Ich mach Schluss mit dir》

《Apart from you》

《与你分别》

5. 信時潔作曲《六つの舞踊曲》より〈序曲（遠くの囃子）〉〈きまぐれ〉〈まじめな緩舞〉

《Suite: Sechs charakteristische Tänze》〈Introduction〉〈Grille〉〈Ernster langsamer Tanz〉

《Suite: Six characteristic dances》〈Overture〉〈Caprice〉〈Serious slow dance〉

《舞曲 6 首》之《序曲》《随性》《严肃的慢舞》

6. 早坂文雄作曲《室内のためのピアノ小品集》より〈No. 14〉

《17 Stücke für Klavier》〈Nr. 14〉

《17 Pieces for Piano》〈No. 14〉

《为室内而作的钢琴小品集》〈第 14 首〉

7. 早坂文雄作曲《佐藤春夫の詩に據る四つの無伴奏の歌》より〈鶯〉

《4 Lieder über Gedichte von Haruo Sato》〈Uguisu (Nachtigall)〉

《4 Songs on Poems by Haruo Sato》〈Uguisu (Nightingale)〉

《根据佐藤春夫的诗而作成的无伴奏歌曲 4 首》〈莺〉

（ドイツ語、英語タイトルは各資料による。中国語は卓詩穎氏の訳による。）

プログラム 1 と 3 はフーゴー・リーマンがヴァイオリンとピアノのために編曲（和声付け）した楽譜（Breitkopf und Härtel, 1902）に基づく。ただし、今回はヴァイオリンではなくソプラノの独唱とピアノ伴奏による演奏であったため、リーマン編曲版とあわせてヴィクトル・ホルツ Viktor Holtz（1846～1919）がドイツ東洋文化研究協会（OAG）の会報に寄稿した“Zwei japanische Lieder”（*Mittheilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*: 1873-76, Band 1, Heft 3, pp.13-14）の旋律を参照した。

プログラム 1 と 3 の原曲に関連して、信時潔によって編曲された作品をプログラム 2 と 4 に取り入れた。プログラムの構成については、それぞれを比較できるように配置した。

信時潔の作品に続いて早坂文雄のピアノ曲と無伴奏歌曲が演奏された。

今回の選曲は、シンポジウムの内容と対応したものであり、東洋（日本・中国）から西洋、西洋から東洋といった双方向性にも留意した。

謝辞

本企画を 2022 年度「支部横断企画」にご採択くださいました長木誠司先生をはじめとする日本音楽学会関係者の皆様、コメンテータをお引き受けくださいました塚原康子先生、傍聴記執筆をお引き受けくださいました柿沼敏江先生、関連イベントをコーディネートしてくださいました安川智子先生、藤田茂先生、チラシを作成してくださいました岩本馨先生に心より御礼申し上げます。また、当日の音響機材をご担当くださった磯部英彬さま、楽譜データをご提供くださった Breitkopf und Härtel 社のマティアス・オットさま、後援してくださいました京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにも感謝申し上げます。